

令和4年度伊賀市文化振興プランにかかる講演会及び意見交換会概要

令和4年9月1日

伊賀市文化会館

1 講演会「自治体が自ら文化政策を行う本当の意味を考える」

伊賀市文化振興審議会会長 中川幾郎さん（帝塚山大学名誉教授）

・全国の数多くの自治体が条例も持たずに、文化政策が無秩序の中に置かれてしまっている。そのような中で伊賀市として、文化政策の理念や方向性、責任を定めた条例をようやく備えるに至った。条例を持つということは、ホール、図書館、公民館も含めた総合的な文化政策をどのように進めるかということを体系的に明らかにするものである。現在、一般市においては8%ぐらいしか条例を持っていない。伊賀市はその先頭部隊にいよいよ入ったということである。誇りに思っている。

・市民文化（公平・平等）とは＝市民の文化的権利を保障するという政策の柱である。都市文化（選択・集中）とは＝都市の活性化のためにアートを使う、ということ等が許されることだ。あくまで「例えば」だが、芭蕉さんを中心に都市の活性化を図ると考えるなら、そこに集中的に投資していくという戦略を取らねばならない。あれもこれも、何でもと言ってしまふ（都市文化政策を公平・平等論でやってしまう）と、うまくいかない。

・市民文化の根本精神は、「人は文化的に生きる権利がある」（国際人権規約）ということを確認することだ。しかしながら、学校教育および社会教育の中でそのような多様な権利がきちっと保障されているかどうか、多くの自治体で問われている。現実には、暇とお金と健康と病気でない家族、多様な人間関係に恵まれた人ばかりが、文化芸術をこれまで楽しんできたのではないかという批判がある。つまり、「強い者勝ち」の芸術になっていないか？その逆の立場にある人たちが芸術から遠ざけられて当たり前なのだろうか問われてくる。

・伊賀市の文化振興プランは、これらに非常に視点を置いて考えられている。だから、強いもの勝ちの政策ではなく、むしろ社会的少数者を重点的に、ソーシャルインクルード（社会包摂）に取り組むために3つの次元、すなわち「施設」「事業・制度」「人材」（ハード、ソフト、ヒューマンの3つのウエア）について点検していこうと考えている。国は、文化芸術基本法の中で社会包摂を言い始めた。劇場法（および大臣告示基本方針）では、学校や障害者施設と連携せよ、地域コミュニティの活性化に寄与してくれ、医療機関と連携することも望ましい、とまで言い出した。更には障害者による文化芸術活動推進法により障害者が芸術活動を職業とすることが奨励された。障害者がアートや音楽に触れる。各都道府県単位でそ

れを奨励するという基本計画が作られ始めている。

・芸術の存在意義とは。アートは、ヒマとカネの産物ではなく不可欠なものであるということだ。そこから様々なデザインも派生し、日本では劇画、アニメがものすごい富を生産し、「産業の資源」になっている。半世紀から四半世紀内に採用されたデザインが、一般化・生活文化化した所に活きている。例えばネクタイは何の役にも立たないが、男性の服装の中に流入したデザインになっている。役立つ、役立たないにかかわらず、デザインが不可欠なものになっている。そうして私たちの生活を規定していく。革新していくものである。そういう意味で、(歴史文化資源に恵まれる)伊賀という地域は、芸術あるいは文化がまちを絶えず新しくしていくエネルギーを持っていると思う。

・公共文化ホールが行う事業は、ポピュリズム(要求課題)に固執せず、社会に必要な課題(必要課題)に取り組むべき。医療、福祉、教育機関と連携し、アウトリーチ活動も必要になってくる。公共ホールはただの「箱」ではなく、「機関」(オーガナイゼーション)であると私は思っている。お金がない、健康でない、社会との関係がない…人々にこそ、それを回復してもらうようなプログラムを提供することが大事だ。ドイツのホールには「失業者割引」があった。「そんな人こそ、ホールに来て鋭気を養ってください」という思想がある。そのようなプログラムをこれから開発せねばならないと考えている。

・伊賀市の文化振興プランには4つの方針がある。①の「誰もが…参加」とは、ただ鑑賞するだけでなく創造することにも参加を求めている。②はアートの活力あふれた伊賀市を全国に発信すること③地域の魅力向上では、伊賀の持つ様々な文化財を観光だけでなくもっと教育に活用しても良い。④教育、福祉、産業、観光等との有機的な連携。

・これらの実現のため、それぞれの立場の市民が入り組み、手を結び合いながら推進するという関係を作り上げようというのが、このプランである。従来、市民は行政に要求するばかりであったが、私は、舞鶴市で地域のアーティスト、市民文化団体の総力を結集して学校と連携しないかと提案(学校アウトリーチやクラブ活動のサポートなど)した。酒田市、堺市、東大阪市でも呼び掛けし、始動した市がある。これが実現すれば学校との距離が極めて近いものになる。伊賀市でも、この議論が数年以内に俎上に登ると予感している。皆さんの今日のグループ討議でもそのような議論をしてくれればと思う。

・(事業カードを示しながら)、今までは文化行政の中で実態把握ができていなかった、全体のボリュームも見えなかった、民間活動も掌握できていなかった。だから、それぞれの事業を集約した上で、「ここが薄い」「ここはやり過ぎている」といった部分を比較考慮できる客観的データが欲しかった。行政内部のデータは一定揃い、シャープな議論ができるようにな

った。あとは、みなさんが行っている事業をこのカードに書き、文化の計画により力を与えて欲しい。

2 意見交換会「文化振興を進めるために」

①日頃の文化活動において、感じていること、困っていること

②解決策や協力できること

【Aグループ】

- ・「俳句を利用する」、「なかなかニーズが見えない」、「自分たちが施設を使うにはハードルが高い」との意見が出たが、ニーズを把握する機会がもう少し工夫されないか。
- ・文化芸術活動の内容が受け手に十分に「きっかけ」として伝わっていない。
- ・「人」や「場所」がマッチングされれば、どんどん広がっていくのではないか。
- ・人口減少で文化への呼び込みが難しくなっている。
- ・学校での文化的な取り組みでは、ぶんとや市民団体によるアウトリーチが行われている。
- ・ハイトピア、公民館などをニーズに応じて直ぐに使えない。

【Bグループ】

- ・5シーズン（春・夏・秋・新年・冬）を彩る芸術と題し、季節ごとに何かをイメージ（例えば、芭蕉とか施設とか）し、色んな団体・個人によるコラボができれば。
《＝この意見を元に、すぐにでも実現しそうな話し合へと発展した》
- ・音楽サークルなどがそれぞれ独自に活動しているが、互いに手を取り合って音楽文化を盛り上げたい。各サークルが話し合えるきっかけを作ってほしい。
- ・事業カードによって他者の活動を知ること、文化をつなげられれば。
- ・俳句教室に子どもの参加が少なかった。との意見に対して、子どもは教師から俳句について教えられていない。その為、教師を対象にした俳句講座を催し、まず教師に句会の楽しさを知ってもらう事によって教育につながれたと他団体の意見があった。学校と連携していけたら。
- ・子どもを対象とした事業に芸術を活用することで、（自分の）職業への理解が深まった。
- ・展示会場で音楽イベントをするなど、文化芸術の組み合わせができる。
- ・陶芸と華道、絵画などを組み合わせることで、興味・関心が広がる。
- ・高齢の人が増えて若い人が少なくなり、やろうとする事業が限られてくる。
- ・若い人が仕事などで多忙な中、活動のバトンタッチが難しい。
- ・展示会場の近くに駐車場がない。段差があり車いす移動が困難な場所もある。
- ・伊賀には文化施設がたくさんあるが、何かきっかけがないと行かないので、きっかけを作る。芸術はつながっているので、いろんな角度からコラボをしてみてもどうか。

- ・会場まで行けない高齢者もいる為、集会場等で映像をうつすのはどうか。

【Cグループ】

- ・SNSは個々の発信ではなく、幾つかの団体が固まって発信することで色々な人の目に留まる。
- ・文化活動をコラボ的に広げていきたい。
- ・公民館（昨年度末で廃止）がなくなり、市民センターを使うにしても使い勝手が悪い。生涯学習の場としての施設の提供を考えて欲しい。
- ・空いている施設（例えば廃校舎）を、誰でも気軽に使えるようになれば良いのだが。
- ・伊賀は比較的たくさんのイベントが行われるが、そのことをもっと多くの人に知ってもらいたい。
- ・文化活動は産業と無縁ではなく、その活性化により経済効果を生む。施設の運用をもっと広い目で見るといい。
- ・三重大学生が中学の吹奏楽部員の指導を長年継続し、喜ばれている。学生にとっても指導経験が積める。
- ・プランで7つの基本方針が示されているが、市は「何をして欲しいのか」を具体的に示して欲しい。

【Dグループ】

- ・全人口が年に一度は必ず劇場に足を運ぶような、そんなまちにしたい。
- ・文化振興プランを立ち上げたことで、後継者が育ち、文化の華が咲くのではないかとこの夢を持つことができた。
- ・小中学生が文化に触れる機会は他市に比べて多い。子どものときから芸術に触れることがとても大切だ。
- ・文化芸術活動を通して子どもたちに良い影響を与えたい。
- ・担い手が減る中で文化の継承には若者の存在が重要。幼時から芸術に触れる機会が大事。
- ・イベントをするにもお金がかかり、なかなか取り組めない。
- ・文化団体の運営のため年会費を徴収するが、それだけでは賄えない。
- ・練習を行ってきても、発表の場がない。
- ・ステージや楽屋が「劇場」向きではない。
- ・文化財を活用した各種の取り組みは良い反響を得ている。

《中川会長（講評）》

- ・各グループから出た報告が、今後の展開に随分と役に立つと思った。
- ・アーティストバンクを作るには、そこに一定のルール（業務内容等）を設けること。アウトリーチの場合は学校に負担がかからないよう、大きなお世話にならないよう配慮すべ

き。他市では「押しかけていくタイプの人」がいて学校が困っている事例もある。

- ・（施設面の問題では）展示をしたい人もあれば、演劇の練習をしたい、リハーサルしたい人もいるが、その費用が嵩むなどの問題が出たが、例えば廃校舎を活用するとしたらどのような諸準備が必要かなどを公共施設総合管理計画の中に投影させる必要がある。施設を管理する担当者による何らかの「連絡会議」を定期的に設けて、実現方策に結びつけるというアクションを起こせばどうか。
- ・事業自体に何（市の方針）がくっついていないかが見えないので、実施者にとっては「効能書き」「きれい事」とみられるが、それをなくすために「事業カード」を作ったのだ。それぞれの事業を見えるようするため、民間サイドの事業についても事業カードの提出を。
- ・生涯学習の場の拡充の意見が報告された。生涯学習の目的は「1人ひとりが個人的に、生活的に自立できる学びの場が提供されること」と、「家族、近隣社会、地域社会で多くの人が集まり、課題を見つけて共同で解決法を考え、行動できるよう」の2つがある。生涯学習で学んだことを自分だけのものにせず、人に伝え分かち合うことが大事。その広がり意識して欲しい。
- ・どんなまちでも言えることだが、「このまち、大好き」「このまちで生きていきたい」というコアになるのが人口の1%いて、その人々が熱意と愛情を持つ人を見つけて広げていくという動きを作る。信頼できる人々の横の関係を作り、その人間関係が多いまちが栄える。伊賀はそれが可能だと思う。信頼できる人が多いと、信用や力の貸し借りができる。それを増やす一番の触媒が「アート（文化芸術）」なのだ。感動を共有する、心を共有する、そういう意味で芸術というのは生産性がある。だから、自信を持ちましょう。
- ・同じ仲間を集めてコラボをしたい—という意見があった。それをもっと広げていくと、市民の中にプロデュース感覚を持った人が育ってくる。そんな市民プロデューサーを応援する、育成する事業を作っても良い。実はそのプロデューサーを生み育てるまちというのは、行政の中にそのお世話感覚を持った職員がいるのか、その文化がないとダメだ。だから、最先端の職員研修が欠かせない。
- ・お金が足りないという発言もあったが、みなさんふるさと納税をしたらどうか。それを文化事業に使うという運動を起こしても良いのではないか。みなさんで一度研究し、「劇団のためにふるさと納税を使ってください」というような、市民が市民を応援する仕組みを開発したらどうか。そうすることで、市の税配分の行方をある程度コントロールする事ができる。
- ・だから、ただの愚痴、ただの不満ではなくて、それを次に制度的にどうつないでいくかという展開を、審議会としては考えていきたい。

3 意見交換会 参加者アンケート集計

参加者（アンケート対象者）43人中、アンケート回答者24人（回収率55・8%）

1. 講演の内容は

☐理解できた（82・6%） ☐あまり分からなかった（17・4%）

ご感想があれば（記述回答欄）

- ・ひとつ上のレベルの話で、「なるほど」ということも多かった。参加者には文化を発信したい人が前提の部分もあったように思うが、文化に参加する人を増すことに困っている人が多いと思う。
- ・とても参考になった。もっと密な会合ができれば良いまちづくりができると思う。
- ・文化振興の基本はよく分かった。個々の活動、団体の意識、実状とリンクさせるのはどのようにすればいいのか、まだ分からない状態だ。
- ・素晴らしい芸術を発信するためには費用がかかる。経済的なことなど何もかも整った富裕層は参加できるが、経済的余裕のない人は優れた技術を持っていても参加できない。そのような人が参加できる助成をお願いしたい。
- ・普段なかなか文化についての話を聴くことがないので、参加できてよかった。
- ・伊賀市の宝である文化財を活用することの大切さを再認識する機会になった。
- ・とても分かりやすい講演だった。
- ・色々なことを知り、勉強になった。
- ・とても参考になった。

2. 意見交換会について

☐とても有意義だった（21・7%） ☐有意義だった（65・2%）⇒満足度86・9%
☐あまり参考にならなかった（13・0%） ☐参考にならなかった（0%）

3. 今後、意見交換したいこと（記述回答欄）

- ・定期開催で大きな事業にできるものが出ればと思う。何か大きな事業を企画したらどうか。
- ・今日の1時間の話し合いの中でも、次への企画等につながることもあり、有意義だった。

4. ほかに意見があれば（記述回答欄）

- ・もっと時間を取って建設的に前向きに深い話ができればよかった。
- ・ジャンル別の話し合いが必要と感じる。

- ・ 私個人としては（他者の話を）聞いていても、「ちょっと違う」と思った。それぞれに近い分野で話し合う方が、もう少し深く議論できると思った。
- ・ 類似団体をひとつのテーブルに着かせれば課題が具体化すると思った。
- ・ 代表を集めると高齢化が目立つので、50代までの世代で意見交換を。
- ・ プランの7つの基本方針と団体の活動内容がそれぞれどうリンクするのか？これが具体化されないとプランは画餅に終わる。
- ・ 小さなイベントを集約して大きなイベントにする努力。外に向かって発信する努力が必要。事業カードだけでなく、施設や組織も登録式にしたらどうか。
- ・ 文化都市協会として、文化活動を促進するにはどんな支援ができるのか、具体的に提示してもらえればありがたい。
- ・ AとBのグループの距離が近すぎて、グループ内の声が聞き取れなかった。
- ・ 開催案内がもう少し早いと助かる。
- ・ 地域では伝統行事の継続が大変難しくなっている。
- ・ 文化は金食い虫ではない。経済活動を活性化する道は、工夫すればあるはず。